

## 2017年10月15日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 10章 24～48節

説教：神はかたよったことはなさない

はじめに

二千年前、エルサレムに最初のキリストの教会が建てられました。そこには、かつてユダヤ教を信じていた人たちが改宗し、クリスチャンとなった人たちが次々と集まって来ます。これ見て、強い危機感を抱いたのがサウロという人でした。ユダヤ教の中でも厳格なパリサイ派に属していたサウロは、律法を否定するかのような振り舞いをするクリスチャンが許せません。教会に押し入り信者を捕まえ、牢に投げ込み、迫害していきます。それがあまりにも激しかったので、エルサレムから脱出して地方に逃れる者も出て来ます。その人たちはどうしたか。沈黙することなく、イエスの死と復活を伝え続けます。そうしたらそこでも信じる者が起こされる。そのようにして地方の町や村にも教会が建てられていきました。

喜んでばかりいられません。できたばかりの教会をだれが指導するか。切実な問題となります。それでエルサレムに留まっていた使徒たちが手分けして地方の教会を訪問し、指導することになります。ペテロもこの働きのために、あるときヨッパという港町に向かいました。

そこで事件が起きます。ペテロが屋上に上がって祈りをしていたら不思議な幻を見るのです。汚れた動物が入った大きな敷布のようなものが天から降りて来て、これをほふって食べなさいという声が聞こえてきます。ユダヤ人は決して汚れた動物を食べないと言ってペテロは断るのですが、そんなやりと

りが三回繰り返されて敷布は天引き上げられ、見えなくなりました。これはなんのことかと考え込んでしまう。ちょうどそこへ三人のローマ兵がやって来ます。何の用かと尋ねると、「ローマ軍の百人隊長コルネリオの家には是非来てもらいたい」と答えた。それが前回までのあらすじです。

### 1 ペテロの疑問

#### 1) これは偽りか、真実か

ペテロは、仲間を数人連れて三人のローマ兵に導かれるままにコルネリオの家に向かいます。「是非来てください」というのでやってはきましたが、腑に落ちないことがたくさんあります。なのでペテロはコルネリオの家に着くなりこう尋ねます。「あなたがたは、いったいどういうわけで私をお招きになったのですか。」

ペテロはユダヤ人でしたから、彼らのしきたりに従って外国人とは付き合ってはならないと教えられていたので、とてもそんな招待は受けられないと思った。ところが神は「彼らといっしょに行きなさい」と言われる。それでとまどいながらも神のことばに従い、ここまで来た。けれども普通ローマの百人隊長が一般のユダヤ人を家に招くことなどありません。いったいどうしてあなたがたは私を招いたのか。その理由を知りたいと願うのは当然です。

これに対しコルネリオは、30節以降で語り始めます。四日前、午後三時の祈りをしていたときに輝いた衣を着た人がやって来て

「ヨッパにいるシモン・ペテロを招きなさい。彼は皮なめしシモンの家に宿泊している」と語った。それで三人の部下たちをあなたのとこに送ったのだと話します。

みなさんがペテロだったとして、このような話を聞きどう思うでしょうか。納得できるでしょうか。少なくとも二つの疑問が湧いてくる。一つ目。この話は信用できるのか、です。ある日突然、ローマ軍の百人隊長から呼び出しを受けたのです。それだけでも緊張することですが、彼らは絶対につきあってはならないと教えられていた相手です。これは何かあると思うのが普通でしょう。クリスチャンを逮捕するための口実を作るために罠にはめようとしているのではないか。そのように警戒するはずで、それが作り話でも罠でもない。全部真実であるとわかった。なぜそう思ったのか。コルネリオのことばです。「いま私たちは、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、みな神の御前に出ております。」

コルネリオはローマ軍の百人隊長という、イスラエルを支配する側にあります。いっぽうペテロはイスラエルの田舎で漁師をしていた何の肩書きもない一介のユダヤ人に過ぎません。コルネリオがペテロに頭を下げることなどありえない。ところがコルネリオはペテロで迎えるとき、足もとにひれ伏す。彼だけではない。家族、親族、友人、そして部下たちも集めてペテロ到着を待っていた。自分たちは主のお話を聞くために集まり、神の御前に出ているのだ、と言う。そこには支配する者と支配される者の違いもなければ、肩書きもない。ただ神の前にへりくだっている人々がいます。その姿を見たとき、コルネリオのことばは真実であると確信します。

## 2) 何をするために自分は招かれたのか

しかしまだわからないことがある。二つ目の疑問。ヨッパからカイザリヤへやって来たのはいいが、自分はコルネリオの家で何をすればいいのか。実は、ここに来るまで神はいっさいペテロに教えていない。ペテロが戸惑っていると、コルネリオがこう語るのか聞こえてきました。「いま私たちは、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとしている。」

「主イエスがあなたにお命じになったこと」と言っています。ペテロはこれを聞いて驚きました。「主イエスがあなたにお命じになったこと」が何を指すのか、一つしかありません。主はよみがえられた姿を弟子たちに現し、こう語ったことばです。それはルカの福音書 24 章 46～48 節にあります。「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらのことの証人です。」

ペテロが驚いたのはなぜか。これはイエスの弟子だけしか知り得ない事実だったからです。ほかのユダヤ人でさえ知らない話ですから、まして異邦人のコルネリオが知るはずもない。それがコルネリオの口から出てくる。これは神がなさっていることだと確信します。それでペテロはすべてを納得して 34 節でこう言います。「これで私は、はっきりとわかりました。」

## 3) 検証する

コルネリオの家に来るまでずっと迷いがありました。異邦人の家で食事をするなど、

ユダヤ人社会ではまったく考えられないタブーです。神からの促しがあると信じてここまで来たのですが、もしかして勘違いではないか。なにかの思い過ごしではないかと、どこかで疑っている。納得がいかなければ途中で帰ろうと思っていました。

しかしコルネリオの口から聞いたことと、自分が経験してきたことがまるでパズルがはまるようにすべて一致して矛盾がない。これは間違いなく神の御手の中にあって起こっていることだと確信が得られた。ここまで来れば、自分がここで何をすべきかは明らかです。主イエスの死と復活を間近で目撃した者として証しを始めます

話は少し変わりますが、先週北海道聖書学院で「異端カルトセミナー」が開かれ、講師の小岩裕一先生がいろいろと突っ込んだお話をしてくださいました。先生が教えてくださった「教会健康度チェックリスト」というものの中にこんな項目がありました。「不思議な現象と思わせる体験をさせて、吟味されないままの証しで体験を強調して、指導者や教会の思想を正当化する。」

不思議な現象が起こることは否定しません。時には起こります。私たちは奇蹟を信じます。不思議な神のお取り扱いを受けることももちろんあります。でも、それがすべて神から来ているものなのかどうか、きちんと吟味しなさいと言うのです。そんなことしなくても、と思うかもしれませんが。でもペテロはどうしたか。彼は不思議な体験をしました。それでも最後までチェックしたのです。本当かどうか。事実をつきあわせていきました。そうしたら、すべてに矛盾がない。すべて一致した。それでこれは神からのものであるとわかって、前に進んでいった。

## 2 神はかたよったことはなさない

### 1) イエスを証しする

ペテロが異邦人の前でイエスのことを語るのこれが初めてです。ユダヤ人だから何か特別な語り方をしたのか。いいえ。ペテロ自身が言っています。34節。「神はかたよったことをなさらず、どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるのです。」

神はかたよったことはなさないのですから、語るべき内容は異邦人であってもまったく同じ。ナザレのイエスは神から聖霊と力を注がれ、良いわざをなして、悪魔を追い出し、すべての者をいやされた。しかし人々はこの方を気にかけて殺した。けれども神はこのイエスを三日目によみがえらせてくださり、私たちに現れてくださり、いっしょに食事しました。私たちはそのことの証人となるようにと召された者である。旧約聖書の預言者たちもみな、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しが受けられるとあかししている。

### 2) 異邦人にも聖霊が下る

ペテロがこのように話をしているうちに、人々に聖霊が降りました。神はかたよったことはなさない。頭ではわかっていたつもりでした。しかし、異邦人にも聖霊の賜物が注がれる。その事実を目の当たりにして、ペテロと一緒に来たユダヤ人クリスチャンたちは腰を抜かすほど驚いた。神は徹底的にかたよったことはしない。ペテロは早速、洗礼の準備をするようにと指示をし、この日初めて公に異邦人がクリスチャンの仲間入りをすることになりました。

ユダヤ人ではない私たちは、キリスト教会に自由に入りができます。それが当たり前であるかのように私たちは思っていて考えたこともない。しかし聖書を読むと、二千年前は異邦人が教会に来るなど絶対にありえないと全員が思っていたと書いてある。もちろんそれが間違いであることは後でわかり、修正されていくわけですが、もしこれを人の手でやろうとしたらどうなったか。賛成派と反対派で二つに分かれ対立し、正しい道にたどりつくまで何年もかかったでしょう。しかし、神はたった四日間でこれを成し遂げるのです。もちろんこの後、ペテロがエルサレムが帰ってから激しい非難にさらされるのですが、それでもペテロがきちんと説明したら、みな沈黙し、全員がこれは神がなされたことだと認めました。神がなさることは、このように進んでいきます。

### 3) イエスを木にかけて殺したことを告白する

このことから教えられます。教会でいつか大切なことを決めなければならないときが来るかも知れません。本当にこれを選んでいいのかどうか、いろいろな意見が出てくるでしょう。その時私たちはどうするか。「指導者の意見に従いなさい」ではありません。もしそうしたらいつの間にかカルト教会になります。これは神からのものであるかどうか、徹底的に吟味していく。それは神を疑うのとはまったく違います。神から来るものにはあいまいさがありません。影がないと言ってもいい。すべて光の中にあって矛盾がない。そのことを確認していく。もしそのような作業を地道に続けていけば何が起こるか。聖霊が働きます。人が救われるのです。しかし

逆に、もしそうしなければどうなるか。聖霊が働きません。霊的に飢えかわき始めます。ざわざわして落ち着かなくなり、平和がなくなっていく。そのことを私はかつて経験しました。

ですから私たちは常に告白したい。イエス・キリストを木にかけて殺しました。それを認めることは恐ろしいことでしょう。でもイエス・キリストの名を信じる者に、この方は罪の赦しを与えてくださる。ペテロははつきりとそのことを語ったとき、聖霊が下り、異邦人が救われた。私たちもそのことを告白し続けたいと願います。